

はじめに（事業を振り返って）

校長 大西 英人

2022年4月から、いよいよ高校では新しい学習指導要領が開始されます。新しい学習指導要領では、「先行きが予想しづらいこれからの社会では、知識の量だけでなく、自ら問題を発見し、答えや新しい価値を生み出す力が重要になる」という考えから、知識、技能の習得よりも思考力、判断力、表現力等を重視する方向が鮮明になってきています。探求的な学びが、次代の学びの中核であることは明確なことでありと考へます。

現代の社会状況は、VUCAの時代（「Volatility(変動性)」「Uncertainty(不確実性)」「Complexity(複雑性)」「Ambiguity(曖昧性)」）ともいわれるように、これまでの常識では測れない事態が次々と発生するような状況です。新型コロナウイルスの感染拡大もまさに、このような時代を象徴している事象のようにも思います。年度が替わっても、断続的に新型コロナウイルスの感染拡大が続き、本事業の最終年度となる本年度も、学校教育活動に様々な制約を受けた1年となりました。海外渡航はもとより対面での研修等への制限の中、国内在住の外国人留学生等との交流プログラムの実施やネットワークを利用した活動を導入してきました。しかし、グローバルな視点の育成については、やはり課題が残り、オンラインによる取り組みも、一方で生徒達のネットワーク活動のスキル向上をもたらしましたが、意見交換のタイムラグや発言順序等に縛りがあり、自由な意見交換を行う場としては、これまでの対面方式に比べると、まだまだ十分という訳にはいかないように感じました。改めて、これまでは全く当たり前であった人と人との直接的コミュニケーションが、実は非常に大切なことであったのだということに気づかされました。

本校では、平成31年（令和元年）より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の研究開発名を「奈良発！未来を創造するグローバル・リーダー育成プログラム」とし、学年全生徒を対象とした課題研究の計画・実践を柱としてプログラムの開発に取り組んでまいりました。探求型の活動においては、教員は直接的な指示や指導を控えながらも、学びのデザインに沿った導き、指針を与えることが求められ、指導する教員団にとっても生徒とともに考えながらの事業実施でありました。学年すべての生徒を対象とした取り組みであったため、生徒の数だけ研究テーマがあり、生徒の数だけ試行錯誤が繰り返されました。満足いく結論にまで至らなかった生徒達も少なからずいましたが、課題に取り組んだことにより、現実の社会の課題に着目し、その課題に主体的に向き合い思考した経験と、解決に取り組むことにより得られたスキルは、生徒達の大きな財産になったと考へます。

プログラムを終えるに当たり、得られた研究の成果をいかに活用し繋げるかが、次の大きな課題となります。今後は、本プログラムで得られた成果の普及と、さらなる研究の深化に取り組んでまいりたいと考へています。この実践報告書は、令和3年度の本校取組みの紹介とともに、平成31年（令和元年）の指定以降の研究の成果をまとめたものです。是非、多くの方々にご覧いただき、ご批判やご助言を頂戴できればと願うところです。

最後になりましたが、この3年間、当事業推進のためにご協力いただきました、県教育委員会事務局各課をはじめ、運営指導委員の皆様、連携いただいた大学や関係機関、企業の皆様、本事業のコンソーシアム構成機関の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、今後とも一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。